

シナイ山からローマへ

——世界諸宗教の共同礼拝に参加して——

明治神宮権宮司 副 島 廣 之

サダト大統領に感動 —— 要請快諾の裏の経緯 ——

モーゼがシナイ山でヤハウエの神から十戒を授かったのは、西紀前一二〇〇年の頃といわれている。「わたしは君をエジプトの地、奴隸の家から導き出した君の神ヤハウエである。わたしのほかに他の神を持ってはならない……彼らを拜んではならず、これに仕えてはならない（旧約聖書）」ここに一神教が成立し、千二百年の後、イエスによってキリスト教が開かれ、ローマ帝国がこれを公認したのは四世紀の初めといわれる。つまりシナイ山からローマへと、宗教史の流れはおよそ千五百年の時を必要としたのである。だがこのたびのわれわれの旅は、シナイからローマまで僅か一週間にすぎなかった。

今年の初め、世界連邦日本宗教委員会の事務局から、シナイ山での世界諸宗教の共同礼拝に参加を要請され、いささかの躊躇もなく承諾する気になった。シナイ山は『旧約聖書』の出エジプト記に出てくる聖地として興味深く、誰しも一度は訪れてみたい霊山である。だが私の場合、もう一つの理由があった。

七年前の昭和五十二年、私は比叡山の葉上照澄師を団長とする神仏諸教など数人の宗教者と共に、イスラム最高審議会事務総長T・オーエイダ博士の招きに応じてエジプトを訪問し、カイロ郊外の大統領別邸にサダト

大統領を尊敬した。大統領は開口一番、私は東洋人であると前提し、日本が過去百年で成しとげた近代化を賞讃し、親愛の情をもって我々を迎えた。

団長はじめわれわれは、昔より今に至つてなお、宗教に根ざす紛争が絶えないのは遺憾であること、世界平和のためには宗教間の相互理解を深めるとともに、各国の主権の確立と共存をもととしての世界連邦制が必要であることなどを語つた。一時間におよぶ会談の内容は省略するほかないが、その後六ヵ月余を経てサダトはエルサレムに飛び、劇的な中東和平への演説を行つたのである。

「私は長い間慎重に考えて決定した。というのは神が決定したのである。戦争の悲惨さを根絶することが私の責任である。私はそのためには地の果てまでも行く。イスラエルの国会でイスラエルの人々にも話しかけよう。そして、その後は神の思し召しのままになる。……アブラハム、ザガリア、モーゼ、イエスのように、みな互いに偏見をなくそう——」。

私は翌日の朝刊に載せられた演説を何度もくり返して読みながら、深い感動を禁じえなかった。「私は地の果てまでも行く。そしてその後は神の思し召しのままになる——」。何という崇高な言葉であらうか。それは宗教の信仰に支えられた気魄に満ちたものであった。

やがてカーター米大統領の調停によってベギン（イスラエル）、サダトによる三者会談がキャンブ・デービットで開かれ、それを報じた新聞が、宗教的見地からこれをキリスト、ユダヤ、イスラム三教の会談と記していたのは、まさに適切な評言であった。

一九七九年（昭和五十四年）十一月、シナイ山麓で行なわれたシナイ半島返還式には、サダト大統領から招聘を受け、葉上師、大本の広瀬静水師等が参列された。私は都合で列席できなかったが、その際、世界連邦日

本宗教委員会から提案したユダヤ教、キリスト教、イスラム教による「中東和平を祈る共同礼拝」が、アズハル（イスラム教学最高機関）総長を導師として、エジプト国内の三教による特別イベントとして挙行されたのである。

広瀬師の報告によれば、この日、サダト大統領は三つの一神教の揺籃の地に立っていることの意義を強調し、全世界のすべての人々の間に寛容と共存が再び肯定され、友愛と友好を推し進め、流血、暴力、憎悪を廃棄し、平和を実現しようと訴えた。そして、この崇高な目的を達成するための共同礼拝堂の建設を提案したという。

以上いささか紙数を費やしすぎたが、このたびのシナイ山行きに私が即座に参加の意を表したのは、そのような経緯があったからに外ならない。

各宗派から百三十人 ― 執銃の兵が見守る中 ―

さて今回のシナイ山共同礼拝には、日本から神仏基諸教など二十八人（不肖団長）が参加し、アメリカ、イשראל、エジプトからもそれぞれ三十人あまり、宗教別にいえば日本は別として、外国勢はキリスト教（コプト教、ギリシャ正教、カトリック、聖公会等）、ユダヤ教、イスラム教などで、参加総人員は百二、三十人にも及んだ。式典は緊迫した中東情勢を反映し、銃を手にした監視兵が見守る中で、三月六日午前十時三十分から約二時間にわたって行なわれた。式場といっても、それはシナイ山麓ラハの広場と呼ばれる一木一草とてもない荒野、先年シナイ返還式が行なわれた付近である。協議の結果、礼拝は各宗教約五分ないし十分の持ち時間で、それぞれの儀礼にしたがって順次進めることが決定された。

式は思い思いの服装をした全参加者が、真日の照りかがやく砂漠に大きな円陣をつくる中で、アメリカの聖

ヨハネ聖堂長丁・モートン師の総合司式、エジプトのシャラーン博士の進行によって始められた。

先ず最初は大本の祈りで、修祓ののち広瀬師の祭詞奏上があり、つづいて神道の一団で筆者が祈願詞の奏上を行ない、特に、

明治天皇の御製、「久方の空はへだてもなかりけり、地（つち）なる国はさかひあれども」

昭憲皇太后御歌、「へだてなく五つの国にまじはるも、心のまことひとつなりけり」
を奉唱した。

仏教は葉上師と中山寺の池田瑩輝師、立正佼成会の下山勝弘理事らが信徒の人たちを交えて、三帰依文と般若心経の読誦を行ない、キリスト教はカトリック司教協議会事務局長三末篤実神父の祈りの言葉の朗唱があつて日本側の祈願は終了した。

つづいて外国側の宗教となり、先ずキリスト教各派が出場し、ユプト教の祈りに始まりハレルヤの合唱、聖書朗読、讚美歌合唱などが行なわれた。

ユダヤ教はラビの祈りの言葉にしたがつて礼拝し、美しい娘たちを交えた一団が肩をゆすり手をひろげ、法悦の境にあるかのように見受けられた。目の前には峨々としたシナイの岩峰が天空高く聳え、モーゼの子孫であるユダヤ教徒たちが、われわれとはまた違った感懐を覚えるのは無理からぬことのように思われた。

ついでアメリカインディアンの聖者が、彼等のもつ汎神論的な宗教の解説を行なったのち祈りをささげた。

やがて正午となり、イスラム教の一団がメッカの方向に向かい、イマムを先達としてコーランを朗唱し、アラークバル（アラーは偉大なり）を繰り返し、幾度か砂上に跪坐して拝礼した。最後にスーフィー教（イスラム神秘主義の宗教とか）の礼拝があり、そのあと全参加者が総立ちとなり、円陣のまま手をつなぎあつて黙

禱をささげ礼拝式を終わった。

共同礼拝に参加した各国の宗教者は翌七日未明、懐中電灯をたよりにシナイ山（標高二、二八五メートル）に登頂し、頂上において燦然と輝き昇るご来迎を拝した。巖上に坐して瞑想する者、合掌して頭を垂れる者、万物の弥栄を祈って万歳を三唱する者など、それぞれ思い思いに祈りを籠めた。これぞ巧まざる共同礼拝の自然の姿であったともいえよう。

やがて下山となり、自然石の階段を降りたところ、エリアフと呼ばれる糸杉の大樹が神さびて立つ山中の静寂境で、参加者一同は再び手を取りあって、「ピース、平和、シャローム」などといくたびか唱和したのち黙祷を行なった。そして更に下降し、山麓のセント・カタリーナ修道院に詣で礼拝の全行事を終了した。

山に神が降臨の伝承 — 日本 の 山岳信仰 に 似る —

砂漠の中に建つ山小屋風のホテルに帰ると、先刻登頂したシナイ山が彼方に望見された。モーゼがこの山に籠もった当時のエジプトは、アブシンベル神殿などを建設したラメス二世の頃と推測されている。太陽神アモン・ラーを初めとする多神教の世界で、おそらくシナイ半島あたりもエジプトの神々の世界の中にあつたであろう。半島南部に屹立するシナイ山は太古には火山であつたらしく、聖書にもそれらしい記述があつて、現にこの半島には温泉が湧き出ているという。その真偽は専門家に譲るとして、山に神が降臨するという伝承は、一歩進めれば神体山の信仰にもつながるといっては短絡になるであらうか。聖書にも山中が禁足の場所であったり、穢れた身をもつて入ることを禁じたりしている。

このように考えると、シナイ山も、日本の富士、御岳、白山などに通じる宗教性をもっていたように思われ

てならない。山頂に十字架をかかげた石造の小祠、修行者が籠もった山麓のカテリーナ修道院も、日本の山岳信仰の社のそれと対比して考えられるように思われた。

こうした中でヤハウエの神が出現し、きびしい唯一神の信仰を要求し、ここに一神教の発生を見るに至ったのであるが、これを宗教の進化とみるか否かは所見を異にするだろう。だが、それは、少なくとも人間がもつ素朴にして寛容な宗教意識の中から、新たに生まれ出た個性的な新宗教であったと言えるのではなからうか。これは一神道人としての私の所感にすぎないが、ともあれ日本山岳会の一員でもある私は、シナイ山を身近なものに感じ、ひそかに登拝した喜びと満足感を味わっていたのである。

いよいよエジプトを発つ日、ハムシーン（砂あらし）にあつてカイロ空港で一日半の足止めを余儀なくされた。やっとの思いでイタリアに向かう機上で、一行の誰かがこれをモーゼのエジプト脱出になぞらえ、これこそ「出エジプト記」だと冗談を飛ばした。

ローマ入りしたわれわれは、バチカン諸宗教聖省ジャド長官以下旧知の人々と W O R E C（昭和五十六年東京で開かれた世界宗教者倫理会議）の残務終了についての挨拶を交わした。そのあと教皇ヨハネ・パウロ二世に謁見し、さらに陰の教皇といわれるイエズス会の P・コルヴェンバツハ総長と会見した。

また、北イタリアの片田舎レディオに飛んで、日本に馴染みの深かった故ピネドリー枢機卿の墓前に『W O R E C 紀要』一冊を供え、生前の尽力を謝しその冥福を祈った。W O R E C は卿が主催したネミ会議（日本バチカン宗教会議）が発端となっただけに、事務総長をつとめ、個人的にも卿と親しかった私としては、これの一つの事を終わって肩の荷をおろす思いであった。（中外日報八昭和五十九年六月一日 V より転載）